

基準8 社会連携・社会貢献

【現状の把握】

本学においては、教育と研究という本来の課題の遂行と併せて、その本来業務の遂行と密接不可分のものとして、社会連携や社会貢献の活動を位置づけている。そうした活動の柱は、以下に述べるとおりであるが、平成24年度より、社会連携活動の強化と機能化のために「環境・地域交流センター」を設置した。今のところ、従来の学内委員会の部分改組の範囲に留まるが、一連の社会貢献活動の全体的総括（『地域交流年報』の刊行）と他大学との連携事業の推進に従来には見られない活動を進め、一定の成果を挙げることができた。今後のさらなる活動の発展を期してセンターの位置づけなどを検討する段階にあると思われる。

本学が取り組んでいる社会貢献としては、① 公開講座、② オープンカレッジ（履修証明プログラム）と聴講生制度、③ 市立岐阜商業高校との高大連携、④ 出前講座、⑤ 地場産業との連携事業、⑥ 学外公職、⑦ 岐阜大学・岐阜経済大学との連携事業をあげることができる。

① 公開講座

毎年、メインテーマを設定してシリーズで公開講座を行うと同時に、単発の公開講座も数多く行っている。最近5ヶ年のメインテーマは「生活の中の病気予防—健康との調和—」（平成21年）「英米文化の楽しみ」（平成22年）「鵜飼を科学する」（平成23年）「暮らしの中のユニバーサルデザイン」（平成24年）「「知」を探求する」（平成25年）である。平成24年度に行った公開講座の一覧を資料8-Aに示す。毎年、同程度の数の公開講座を開催しているが、過去5年間の講座数の一覧を資料8-Bに示す。

資料8-A 平成24年度に行った公開講座の一覧

No.	講座名		担当教員	開催日	受講者 (人)	
					一般	学生
1	「暮らしの中のユニバーサルデザイン」	情報のユニバーサルデザイン	岐阜聖徳学園大学 教授 石原 一彦	6/30(土)	15	0
2		都市空間でのユニバーサルデザイン	生活デザイン学科 教授 柳田 良造	7/7(土)	13	0
3		ユニバーサルデザインと視覚表現	生活デザイン学科 講師 小川 直茂	7/14(土)	15	0
4		ユニバーサルデザインとものづくり	生活デザイン学科 講師 奥村 和則	7/21(土)	15	0
5		「読み」の実践から生まれる空間 ～言語のユニバーサルデザイン～	英語英文学科 教授 中西 満貴典	7/28(土)	12	0
6		ユニバーサルデザインフード ～心豊かな食生活のために～	愛知県立海翔高等学校 教諭 佐々木 裕子	8/4(土)	13	0
7	[第10期] 繊維製品品質管理士 (TES) 受験対策勉強会 ※H23年10月～H24年7月に実施(全10回)	生活デザイン学科 教授 宮本 教雄	4/6 (金) 5/11 (金) 6/1 (金) 7/6 (金)	33	0	
8	コレステロール代謝と健康 (学生向け特別講義)	中部大学 教授 横山 信治	7/6(金)	15	67	
9	羊毛でつくるフェルト帽子	生活デザイン学科 教授 村上 眞知子	8/25(土)	17	0	
10	英語音声学入門 (全2回)	英語英文学科 講師 小島 ますみ	8/25 (土) 8/26 (日)	26	0	
11	Excel マクロ入門 (全4回)	国際文化学科 教授 瀬尾 幸市	10/5 (金) 10/12 (金) 10/19 (金) 10/26 (金)	106	0	
12	シルクスカーフを重ね染で 「みどりいろ」に染めてみよう	生活デザイン学科 教授 野田 隆弘	11/10(土)	18	0	
13	中国の民族と祝祭日 (全2回)	国際文化学科 教授 王 武雲	12/1 (土) 12/8 (土)	125	0	
14-21	生活デザイン講座 (全8回) ※岐阜市立図書館分館・ファッションライブラリー公開講座 (全12回)のうち、本学の担当分	生活デザイン学科教員	4/21 (土) 5/19 (土) 6/16 (土) 9/15 (土) 10/13 (土) 11/24 (土) 12/16 (土) 2/16 (土)	121	0	
22	生活デザイン学科特別講義「熱き心」	客員教授 山本 寛斎	7/23 (月)	38	125	

資料8-B 過去5年間の講座数の一覧

	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
講座数	22	22	22	22	22
一般受講者数(人)	487	562	408	383	421

② オープンカレッジ（履修証明プログラム）

平成22年度から社会人向けに4科目120時間からなる履修証明プログラムを設けた。実用英語中級、中国語初級、食品と栄養、建築学基礎の4つのプログラムを用意したが、初年度はPR不足で履修者はいなかった。平成23年度からは岐阜市の広報に募集記事を掲載し、その後毎年受講者がある。

資料8-C オープンカレッジ（履修証明プログラム）の一覧

年度	プログラム名	受講者数（人）
平成 22 年度	-	0
平成 23 年度	実用英語中級	1
	中国語初級	2
	建築学基礎	1
平成 24 年度	中国語初級	2
平成 25 年度	実用英語中級	3
	中国語中級	2
	食品と栄養	1
	建築学基礎	1

履修証明プログラムを開始した結果、聴講生制度が徐々に認知されるようになり、科目を自由に選んで聴講する聴講生の人数が増えた。過去5年間の聴講生数を資料8-Dに示す。

資料8-D 過去5年間の聴講生数

	平成 20 年度		平成 21 年度		平成 22 年度		平成 23 年度		平成 24 年度	
	前期	後期	後期	後期	後期	後期	前期	後期	前期	後期
科目数	5	1	1	1	1	4	7	9	11	11
延べ科目数	5	2	1	1	1	4	10	15	13	12
聴講生数(人)	2	2	1	1	1	3	6	8	8	7

③ 市立岐阜商業高等学校との連携事業

市立岐阜商業高等学校の経営管理科の生徒が本学学生と一緒に中国文化論の授業を受講し、レポート提出により単位取得を可能にしている。また、情報処理演習Ⅲの授業内容の前半7回を受講できるようにしており、2科目合わせて40名ほどの生徒が毎年本学で授業を受けている。中国文化論履修者の中には、これを契機に本学受験をめざし、入学を果たす生徒がいる。

④ 出前講座

毎年、岐阜市の主催する公開講座等で講演を行っている。平成24年度の出前講座一覧を資料8-Eに示す。

資料8-E 平成24年度の出前講座一覧

タイトル	講師名	開催日	場所・依頼機関
あなたの食を考える健康講座	食物栄養学科 准教授 石見 百江	5/9 (水)	岐阜市教育文化振興事業団
食と健康	食物栄養学科 教授 道家 晶子	5/10 (木)	岐阜市食生活改善推進協議会
食と健康 ー健康で過ごすための食生活とは	食物栄養学科 教授 道家 晶子	10/2 (火)	中部電力
身近な食品で染色し 世界でたった1枚のハンカチをつくろう	生活デザイン学科 教授 野田 隆弘	7/21 (土)	夏季サイエンス工房
スポーツと栄養	食物栄養学科 准教授 石見 百江	6/10 (日)	瑞穂・本巣・北方 スポーツ少年団
乳幼児の食生活の現状と問題点について	食物栄養学科 准教授 石見 百江	7/6 (金)	池田町立公立保育研究会
乳幼児の食と健康	食物栄養学科 准教授 石見 百江	9/22 (日)	岐阜県歯科衛生士会研修会
食生活と元気のあるまちづくり	食物栄養学科 准教授 石見 百江	2/9 (土)	岐阜を想う会
代謝向上作戦！ エネルギー消費を増やす方法	食物栄養学科 教授 青木 貴子	2/1 (金)	家庭科学講座 岐阜市科学館
コンクリートのひび割れについて	生活デザイン学科 教授 服部 宏己	1/30 (水)	家庭科学講座
ワークショップ 「ミニチュア織機で織物を織ってみよう」	生活デザイン学科 教授 宮本 教雄	2/16 (土)	岐阜市立図書館分館 ファッションライブラリー
中山道加納宿ー近代建築の保存再生ー	生活デザイン学科 教授 柳田 良造	5/20 (日)	加納まちづくり会
手足の冷えと着装	生活デザイン学科 教授 宮本 教雄	5/23 (水)	岐阜市まなざしの会

⑤ 地場産業との連携

平成24年度には本学教員が、「ぎふベリー」パッケージデザインの選考委員となり、そのデザイン募集に本学生活デザイン学科の学生が出品し、製品として採用された。

毎年、岐阜ファッション産業連合会が主催する「岐阜マザーズコレクション」に、生活デザイン学科の学生が出品し、各種の表彰を受けている。また、岐阜ファッション産業連合会が主催する「ア・ミュージズ岐阜」へ出品と、プロモデルのフィッター・衣装コーディネーターなども務めている。

また食物栄養学科の学生が平成24年度から岐阜県、JA、全岐阜生協連と連携して食農教育実践支援事業を行っている。農業体験を通じて、学生にもものづくりの大変さと重要性について理解を深め、食の意味と大切さを考えさせることを目的としている。農家で枝豆の定植などの農業体験をしたり、JAでの枝豆収穫体験イベントにスタッフとして協力したり、岐阜枝豆に関する調査研究及び枝豆レシピ提案を行っている。

さらに食物栄養学科の学生が岐阜市シルバー人材センターが経営するシルバー柳ヶ瀬サロンにて、鬼まんじゅうを作って、無料配布を行い、まちの活性化と高齢者との交流を図った。アンケート調査結果を食品開発の参考資料とした。

生活デザイン学科では、卒業研究発表会の学外実施、地域の産業と学生の連携、自治体の各種委員会への教員の派遣、公開講座(リカレント、教養)の積極的実施、岐阜市立図書館との共同運営による公開講座の実施や同施設の展示スペースを用いた教員・学生の成果物の展示、設置者が企画運営する県下産官学交流会への積極的参加、近隣のデザイン関連大学・専修学校・高等学校との成果発表会の相互交流等を通して、学生の地域産業の理解、教員の専門知識の提供と成果の公表、成果に対する外部評価の教育へのフィードバック(反映)に努めている。具体的には岐阜ファッション産業連合会主催の「岐阜マザーズコレクション」への参加、JAぎふからの依頼による各種パッケージデザイン(学内コンペ)、設置者各部局からの依頼による各種フライヤーのデザイン依頼などがあげられる。

⑥ 学外公職

平成25年7月1日現在で、学長・教員6名が8件の地方公共団体等の委員・理事等に就任している。依頼機関は、大学基準協会、岐阜県弁護士会、それに地元自治体である岐阜県及び岐阜市の行政部局や審議委員会等である。

⑦ 岐阜大学・岐阜経済大学との連携事業

平成20年度より地域社会の発展とそれを担う人材の育成に寄与することを目的に、岐阜大学地域科学部と岐阜経済大学の間で連携協定が結ばれ、まちづくりのためのワークショップや高校生のためのオープンカレッジが行われてきた。平成22年度に本学も参加した三大学連携協定が結ばれ、年に2～3回岐阜県内各地で開催される「高校生のための街なかオープンキャンパス」などの行事に、本学の教員と学生が参加してきた。

さらに、平成25年度には、岐阜大学応用生物科学部との連携協定を締結し、岐阜大学の保有する農場・演習林諸施設の利用、共同の教育活動の推進などを行う予定である。また従来からの東海学院大学との協定により、管理栄養士資格の取得をめざして毎年、2名程度の編入学の実績も積み重ねてきている。

⑧ その他の事項

本学の現状を踏まえ、改善の方向を探ることは、大学改革にとって不可欠だといえる。社会の側からの大学への刺激や寄与は、さまざまなルートで存在するが、卒業生たちの働く就職先の声は、なにものにも代え難い進言となっている。すでに他で触れたような卒業生の意見を聞く機会や同窓会、教育後援会(学生の保護者で組織)、さらには市議会での質疑なども、同じように貴重な提言を含んでいる。

こうした学外者の意見は、適宜、教授会及び各学科会議等に報告され、教育状況に関する自己点検・評価に反映されている。卒業生、学生の就職先を含む企業関係者、学外実習先の関係者、同窓会役員、教育後援会役員、あるいは学生の保護者・市民など個人からの教育などに関する意見は、必要な範囲で教務委員会や

総務委員会で情報を共有し、教育活動や学生支援活動に生かしつつ、その結果を自己点検・評価に適切な形で反映していると認識している。

【現状の分析・評価】

公開講座、オープンカレッジ（履修証明プログラム）と聴講生制度、市立岐阜商業高校との高大連携、出前講座、地場産業との連携事業、学外公職、岐阜大学・岐阜経済大学との連携事業等、本学は多角的に連続して地域貢献を行っており、地域に開かれた大学として存続している。

出前講座について、英語英文学科で実施してきた岐阜県立岐阜商業高等学校及び同県立大垣商業高等学校での出前講義について、近年（平成22年度以降）その展開が途絶えている。高大連携の促進するうえでも休止状態は望ましくない。今後、本学からも働きかけを行うなど継続的に実施する方向で改善する必要がある。

公開講座は市民と本学をつなぐ直接的な交流の場であり、毎年欠かさず実施できることが望ましい。しかし、統一テーマのもとに実施する企画は、主たる担当学科を設定して実施しているため、必ずしも安定的に全学で実施しているという意識を持ちえてはいない状況にある。今後は、各教員がより積極的にかかわっていけるよう工夫が必要であり、場合によっては、個別のテーマ設定による場合でも、複数の学科の間での連携を検討することも求められるであろう。また複合的、学際的なテーマを取り上げるなど、より多彩な内容のプログラムを作っていくことを視野にいれて実施するのも一案である。

生活科学系の2学科では、地場産業との連携や地域との連携事業に積極的に取り組んでおり、この活動を通じて学生の主体的学習への意識化などが図られており、持続的な取り組みが期待される場所である。しかし、同時に、これらの取組みは主体的自主的に取り組んで始めて学生の学びの成果が意味のあるものとなることから、個々の要請などに対する対応には十分に慎重な検討が必要である。

【改善方策の検討】

オープンキャンパス時のアンケートによると、本学を知るための方法としてはインターネットがもっとも利用度の高い方法となっている。インターネット上の情報発信の方法をさらに検討していく必要がある。

公開講座で教員が積極的に市民向け講座を計画しているが、本学が市中心部や駅周辺にないこともあって、募集人数を満たさない講座があり、開催場所の検討や広報活動の強化が必要である。同時に、一部の教員の過重負担にならないよう、全学的な企画の検討の練り上げと個々の教員の自発性とを結びつける努力が求められる。